故冨來隆先生の御霊に捧げる

木許正生

秋も一段と深まってまいりました。吹く風にも肌に冷たさを感じさせるこの頃でございます。冨來隆先生が亡くなられてから早や八か月になります。生前、月に一度は私宅に立ち寄られた先生から諸々のお話をうかがっていましたので、それがなくなってから何か淋しい物足りなさを感じる毎日でございます。

先生と初めてお出合いしたのが、私が大分大学学芸学部附属中学校に赴任した昭和三十三年(一九五八)の四月ですから、四十年も前のこと、爾来陰に陽に公私ともども、いろいろとご指導をいただきました。私の今日在るは、冨來隆先生のご指導があったればこそと、何時も心に深く銘じ感謝しておるところでございます。よく先生のお供をして県内のあちこちを歩き回ったあの頃のこと、先生独自の話術で熱っぽく話された在りし日の面影……先生の着眼の鋭さ、どんな些細なことでも丹念に気のすむまで研究される先生の執念というか、徹底された学究への情熱には、敬服のことばしかありません。いろんなことが頭の中を走ります。先生からご指導いただいたことは言葉では言い尽くし得ませんが、中でも忘れられないのが、昭和四十三年(一九六八)、『大分県の百年』(大分県)を執筆した時のこと、私はまだ齢四十歳にとどかない三十年代、先生と私とは同じ午どし生まれでちょうど一回り違う先生も五十歳の坂を越えたばかり。随分先生から尻をたたかれながらご指導をいただきました。「現代」の沢山ある諸資料の分別から、それを分かりやすく図式化、図表化する作業に至るまで、総て先生がわがことのように夜遅くまで、それも毎晩のように私にご教授してくれました。私の方がついていくのがやっとのことでした。教材(資料)の構造化、社会科歴史教育の心髄をしっかり勉強したのは、この時だったと思います。そして先生が亡くなられる二か月前、今年の正月のこと、先生が全国各地から玄関の頭に飾る「しめ縄」を集められ、「木許さん、これを基に何かを書こう。一緒にやりましょうや…」と言われ、何回か先生の宅に写真を撮りにまいりました。……

今は悲しくも幽明境を異にされた先生のご霊前にぬかづき、限りない追悼のまことを捧げるとともに、今更めて痛恨の情をこめて、一言申させていただきました。

故冨來隆先生の永久のご冥福をお祈り申し上げます。